―― バルトの教義学の説教批判としての現代的意義 ――

古川 敬康

１．挨拶

寺園先生、この度は、現代のモニュメント的なご著者のご出版を心からお慶び申しあげます。本日は、バルトが教義学の出発と目標は説教である[1]と述べていることから、長年、わたくしがテーマとしている、説教批判における、バルトの教義学の現代的意義について、お尋ね申しあげます。

2. 現代的意義への「序論」

バルトは、「人間は神を語ることはできない[2]」としつつ、説教とは、「神の啓示、イエス・キリストの証言」である「聖書にもとづ[3]」き、「神について現実に語るところではイエス・キリストがその甦りの力の中で登場し給う[4]」もので、「今日この所でも、神の苦しむ僕[5]」である、と述べています。この「神の内在性」は、「神の言葉の受肉」としての「イエス・キリストにおいて起源と意味と基準[6]」を持ち、バルトの教義学は、その「出発」も「目標」も説教吟味に主眼がある、と思います。「説教の吟味が『教義学の課題』である」というバルトが鳴らす警鐘には、次の３つの点に関する説教批判として、バルトの教義学の今日的意義がある、と私は思います。

（1） 説教における問と答

まず、説教における問と答についてです。ご著書に、「神が問い、人間が答える[7]」とあります。その場合の私たちの答とは、自然な良心によるのではなく、啓示の中で、啓示によって与えられる可能性としての「良心の自由[8]」において答える、つまり、人間の答えは、啓示の中に見出される、ということで、良いでしょうか。

（2） 説教のための聖書解釈

神の啓示は、啓示の「証言」としての「人間の言葉[9]」である、「聖書」を媒介としています。しかし、聖書にある「神聖性」と「人間性」との両面性から、媒介たる人間的言葉から区別される、聖書の証言する、「神の言葉」と「啓示」とは何かにつき、「聖書解釈」が不可欠となります。

ご著書では、その３つの原則に「傾聴」「理解」「解釈」を挙げておられますが、バルトの「聖書解釈」とは、聖書そのもの説明ではなく、啓示との関係で神の問いと人間の答えを明らかにする作業ということでしょうか。

（3） 説教のための教義学

では、聖書解釈によって明らかにされる、聖書の証言する、バルトの言う「啓示」とは何か。啓示とは、「神がご自身を現わすということ[10]」ですが、バルトにとっては、「イエス・キリストにおいて現実となった[11]」「神とこの世の和解」の「完成」を指しています[12]。

すなわち、バルトの教義学は、「復活」が「出発点[13]」ないし「起点[14]」として、十字架の「肯定的な答え」を明らかにし、この「イエス・キリストの十字架[15]」による和解の完成を起軸とし、遡及的に[16]、「永遠の初め」にまで戻り、この永遠に初めに、「神の自己決定」として「契約」が成立し、契約の内容は、「神自身が人間の神となり人間は神の人間となる[17]」ことですが、その契約の成就こそが「和解の出来事[18]」であるとしています。これらを前提に本論に入ります。

3. 現代的意義の「本論」

神の問いは「人間の実存、生、意思、行為を問う」「神の言葉」によりますし[19]、人間の答も、啓示の中の答えをもって答えるもので、神の問いも人間の答も、啓示の証言たる聖書にある、ということになると思います。

（1）説教における「問い」と「答」への説教批判―教育的主題説教に関する説教批判―

まず説教準備段階で、何について説教するか、というテーマ設定がなされます。その判断を、会衆や地域とか社会や国や世界の直面している問題や課題、あるいは、心理学を含め教養的に有益な知識や知恵などに関し、会衆や説教者の関心の強弱大小で、選ぶことがあると思います。

しかし、「啓示を説教する限り、説教は神の言葉という性質を持つ[20]」というバルトの主張では、啓示と関わらないテーマ設定は不適切であると思います。そればかりか、「独立した人間の本性と行為に基礎づけられた神認識の用意[21]」を認めるとか、「理性や良心、感情や歴史、自然や文化等にも神の啓示を認める」、つまり、「次々と出現する啓蒙主義」と「福音宣教」との「結合点[22]」を求めるテーマの選択も、「自然的な人間理性」による人間の「自己義認[23]」として、

批判されると思います。

いずれにせよ、説教テーマの選択は、「神は問う」ことに始まり、「人間が答える」ことも啓示に従うことになる、すなわち、イエス・キリストの出来事の啓示から、神の「わたしはあなたと共にいるのに、あなたは何処を探しているのか、何をしているのか[24]」という問いに始まり、これに答える内容の説教テーマとなっているかどうかという点の吟味が要求されていると思います。

（2）「聖書を語っていれば説教である」ということにはならないこと－講解説教に関する説教批判－

次に、聖書解釈に関する吟味です。聖書は、「啓示から区別[25]」され、聖書に基づく説教でも、啓示を指し示さない限り、その説教は、神の言葉として神の内在性が出来事となる説教ではないように思います。

この点、聖書釈義的な注解書等では、最初の読み手（創世記１章なら捕囚民）や状況（捕囚状況）等におけるテキストの意味の現代への適用的な翻訳になりがちです。しかし、バルトのいう聖書解釈によるとイエス・キリストの出来事は、史実的な「歴史（ヒストーリエ）」ではなく、「神の大いなる物語[26]」としての「歴史（ゲシヒテ）[27]」ですから、聖書のどの個所も、この＜物語の視点＞であるキリスト論から、読み解かれるものでしょう。

神の物語のキリスト論的な視点から、物語の世界は、「契約相手」を人間とする「神の一方的な『契約』」による「契約の歴史の舞台」となり[28]、この歴史舞台において、イエス・キリストの出来事たる「和解の実現[29]」は起きます。それは、人間の契約違反の「高慢」という、神と人と自分自身への「反逆[30]」の罪に対する「神の契約意志の貫徹[31]」であると意味付けされています。神の歴史（ゲシヒテ）において、旧約聖書は、神と人間との「契約の時間」であって「待望の時間」であり、新約聖書は、「啓示の時間」であって「契約の成就の時間」とされ、現在の私たちの教会の時代は、その「想起の時間」かつ再臨の「希望の時間[32]」とされています。

したがって、どの聖書個所の聖書解釈も、キリストの出来事の視点をもって、イエス・キリストの十字架の出来事の意味を指し示す「イエス・キリストの復活を振り返りつつ、再臨を望み見つつ[33]」、キリスト論的啓示を告げる内容となっているかを、批判的に吟味することが奨励されていると思います。

（3）説教の神学的内容に関する展開

では、キリスト論的な物語の視点とは何か、ですが、バルトは「神の大いなるドラマ」を「予定論」で展開しています[34]。「原歴史」の「原決定」において、「選ぶ神」と「選ばれる人間」がいずれもイエス・キリストですが[35]、従来の二重予定説的な「然りと否」、「選びと棄却」が、「神は苦しみ給う[36]」中で、「虚無的な」「刑罰としての死」を「神ご自身の事柄」とされた「審判者および救済者」であるイエス・キリストにおいて「契約の成就」として実現した、という視点です。しかし、「問題は和解の現実ではなく、その認識である[37]」とし、その受肉の一連の「客観的な出来事としての和解の出来事[38]」は、「神を語る[39]」説教において、「人間の主観性[40]」に「啓示の主観的側面」として「聖霊の注ぎ[41]」によって「信仰の認識[42]」に達するとされています。

さらに重要なことは、説教において、私たちは、三位一体[43]の神に、「汝」として語りかけられ会われて「初めて」「人格となる[44]」ことです。そこで、バルトは、「神の恵み」と無関係な「倫理問題」に反対し[45]、倫理問題は、「イエス・キリストの恵みの賛美であるかどうか[46]」とその程度にかかっていると主張しています。

最後に、啓示への応答として「生活の営み」は、「奉仕[47]」とされ、倫理的行為は、「同性愛[48]」への対応が変遷したように、啓示では否定される諸科学の啓蒙的見解も考慮しているように思います。また、「妊娠中絶」は「殺人」として「否」としつつ「胎児の生」は「絶対的な価値ではない[49]」とし、「良心的決断」による「信仰」的選択としています。同様に、「文化」も、啓示としては否定されましたが、奉仕の「付随的な業」として「神に命じられたもの[50]」としています。このような意味付けでの時事的諸問題に取り組む説教が示されていると思います。

4.　質問

現代の教会の課題は、真摯にバルトの教義学に耳を傾け、以上の３つの点等につき、自分の説教の批判的自己研鑽をすることではないか、と思うので、表題としましたが、先生のご教示をお願いしたいと思います。

以上